

哲学的科学方法論と研究の現場 2

熊澤峰夫・青木滋之 (Mineo Kumazawa / Shigeyuki Aoki)

名古屋大学 / 会津大学

はじめに 科学を基礎づけるはずの科学哲学が、現場の科学研究者である自分のセンスにはあまり合わない、と感じる科学者は多い。これを不健全であるとして、その原因と対策を「自然主義の科学哲学」の考え方のもとで、科学と哲学の交流を通じて考えてきた。青木・熊澤による報告1に続くこの報告2では、何人かの文系理系両方の研究者達との議論を通じて得た熊澤の理解を報告する。共同発表者の青木と意見の対立点を明白にできれば、この共同研究の第一の成果であると考えられる。次の課題は、その問題点解消の具体策とその実行自己実験（＝科学者と科学哲学者の共同研究の試行）の積み上げであって、それを学会に晒し、議論が沸騰するようにはからうことである。遠くない最終的な目標は、科学と科学哲学の境界設定を困難～不可能にして、境界設定そのものを消去することである。

科学分野における問題点 科学の意味やその基礎付けなどは、科学分野における「教育体系」に組み入れられていない。科学研究のコミュニティには何らかの暗黙知があって、そこに住むと自然に吸収してしまうのである。多くの科学者は、科学の基礎付けに関心はあっても、たまたま学ぶ機会がなかった、あるいは、勉強しようとしたが難しくて良く分からなかった、というのが実情である。科学上の大きな発見や自然災害、科学技術上の大事故などとの遭遇は、この問題を本気で考える絶好の機会だ。同僚の科学研究者達と「厳しい」議論をしてみると、科学の意味や基礎付けにもいい加減なことが多いとわかる。科学研究者大衆は、文系の研究者の発言内容を気にしないので、科学者の社会リテラシー欠損や科学コミュニケーション能力の不足が問われる。要するに、一般の科学者というものは、社会における科学の役割には関心はあるが、それを突きつめた科学の基礎付けや意義への理解は相当希薄なのが実態である。これは、科学のもつ社会的影響力を考えたとき、不都合千万であると考えられる。

科学哲学における問題点 比較的少数の例を除いて、科学基礎論や科学哲学の研究者は、科学を書誌学的に見ているので、科学研究の現場のその実態をあまり知らない。したがって、論理でも心情でも、科学者に伝わる言語をもっているようには見えない。分析哲学の伝統を色濃く受け継いでいる科学哲学には、社会や科学など他分野にも知的に役立つ、という意識は稀薄であるように見える。共有できる集団知の獲得にむけた横方向の学問的交流への関心がうすく、むしろ積極的住み分けを望んでいるように見える。その代償として若手研究者の職は少なく、希望と活力に欠けている。しかし、本来、科学哲学は科学と人間や社会との知的インターフェースとしての大きな機能が期待されているはずである。これへの対応は現代の緊急課題だと言える。

現状の問題点=新しい課題の提起 上記の状態が問題にならなかった時代は過ぎ去っていることに、地球における環境と生命の共進化を研究してきた立場(e.g.,熊澤他,2002)からの新たな問題提起をする。生命や科学研究の発生と進化変遷は、全地球史、あるいは観測できる範囲の全宇宙史上の大事件である。形而上学や経験的科学的の発生や進化変遷もこの世界の自然現象であって、それが自己言及しつつ、形而下の生身のわれわれの生存、生き継ぎ、あるいは絶滅に直接関わる。

われわれ（ヒトという知的群生動物）と科学は、ともに進化現象の産物である。40億年ほど前、なんらかの理由でできてしまった自己複製分子は、複製が自己目的であるように挙動するモノとして、それが継続変遷し、結局、生き継ぐ存在になった。これは進化現象の必然の流れにある偶然の一つの帰結である。ヒトはその生き継ぎのツールとして、高度な知的能力をもち、今、科学と呼んでいる情報システムをもってしまった。環境の情報を検出する経験を積み上げて世界を理解しようとする科学は、今や、ヒトがその生き継ぎに都合のよいように、ヒトと共進化する宿命をもってしまったように見える。

われわれ（環境や科学と共進化する宿命にあるヒト）は、何処へ行くのか？何処へ行きたいのか？これこそ、今われわれが自問自答すべき最も重要な課題だと考える。それは、科学のとどく領域を明らかに超えている。科学基礎論や科学哲学こそがこのような問題を扱わなければならない。

経験的世界の理解によれば、生き継ぐことで存在する gene-meme 複合体であるわれわれは、その自己責任において、将来のわれわれ自体をデザインし、能動的な進化をはかる歴史的宿命にある。本報告では、これを一つのテーゼとして提案するので、諸氏の疑問や議論を得たい。

次の課題とその対処方策 われわれは何を望むモノなのかと問うてみる。本音は「幸せな生き継ぎ」である。もしそれを受け入れるなら、次の課題は、それを目標とするわれわれの将来デザインとその評価と正当化、および、具体的技と術の確保にある。とりわけ、これは将来予測を含む高度な科学と技術を必要とするだけでなく、願望や価値の評価とその予測までを含む智恵の生産を要する問題だ。これらは科学の領域をこえているので、科学や技術に密着したもっと新しい哲学や倫理の課題だということになる。

それには、これまでとは異なった問い方と答え方の学問を要するので、既存の哲学や科学の方法と方法論はもとより、今いる科学者や哲学者は直接役に立たない。では、それにわれわれはどう対処したらよいのであろうか？これには、われわれの研究グループが明快な方策をすでに提示していた：「新しい型の若手研究者を科学者と哲学者の間で育てる。」では、今いる科学者と哲学者は、研究現場で一体何ができるのだろうか？結論は簡単だ。科学者と哲学者は共同して、自分達自身を実験材料（生贄）とする新しい方法と方法論開拓の試行錯誤「自己実験」を開始することだ。それに必要不可欠な方法と方法論は、異分野間で直裁で率直な議論をする風俗を文化～meme として育成することだ。本報告では、その試行錯誤の自己実験のはしりを提示したのである。

文献；熊澤 伊藤 吉田（編）：全地球史解説(2002)、東大出版会